



University of the Ryukyus Library Bulletin. Vol. 26 No. 1 March 30 1993.

## 新 入 生 諸 君 へ — 大 学 と は ? —

附属図書館長 永 盛 肇

決まり文句でいささかパッとしないが、何はともあれ入学おめでとう。希望に燃えて本学の門を潜った諸君に対して、祝福の詞を送るに<sup>やよみさか</sup>「齋」ではないが、同時に、浮かれ気味の入学気分をできるだけ早く切り替えて、これからの数年間、二度とない青春をしっかりと見据えて、有意義な学生生活に取り組むよう切望する。

一般周知のように、大学は学問の府である。諸君は、何を今更そんな決まりきったことをいうのか、と思うかもしれない。しかしながら、このことは、おそらく、諸君がこれまで考えてきたよりも、或いは現在想像しているよりも、

もっと厳しい高度の内容を持つものなのである。高校から新たに進学したばかりの諸君には、まだピンと来ないところがあるかもしれない（卒業してもピンと来ない人もいるが）が、可及的に煎じつめれば、大学は、<sup>あたら</sup>恰も便利屋よろしく、学生に有利な就職条件を具備するためにだけあるのではない。では何のためにあるのであろうか。

そこで、<sup>おこ</sup>痴がましいが、少しばかり、大学なるものについて私見を述べてみたい。

欧州の古い大学、例えばオクスフォード大学は、千年以上の歴史を有するが、その生い立ち

目 次	
新入生諸君へ—大学とは?—	1
大学行政の中の著作活動	3
沖縄関係図書新着案内	7
本学教官著作寄贈図書案内	10
図書館事情	11
医学部分館だより	11
図書館年間主要スケジュール	12

をみると、中々興味深いものがある。この大学は、いわゆる市民階級が造ったものである。もちろん、設立に要する資金その他については、経済的有力者や教会側などの援助にまつところがあったとしても、国家権力や一部の支配者層の手になるものではない。この点が非常に重要であろう。

大学は、それを取り巻く社会的需要によって、さまざまな生い立ちと消長の経過をとるが、市民レベルでの需要に基づく意識の高揚・改革、つまり個人単位の意識の高揚・改革といった理念を基盤として、四つのカレッジ（神学、哲学、法学、医学）から発足したのが、前記したオクスフォード大学である。したがって、学外から理不尽な圧迫や影響を被ることなく、真理探究の学問の府として今日まで順調に発展してきた。

これは、一見する限りでは、さほどとは思えないが、極めて大切なことであって、どこかの国のように、それを必要とするとはいえず、近代化と帝国主義を急ぐあまり、国家権力まる出しでインスタントにでっちあげてきた百年そこそこの大学群とは、根底的に質の違いがあることを物語っている。

ところで、数ある先進国の中で、わが国ほど教育制度の「共産化」と「全体主義化」が徹底して浸透している国は、他に類を見ないであろう。現に見るがいい。或る日、或る時間に、しかも全国一斉に大学入試統一テストを実施する、というよりも実施できる国が他にあるであろうか。この強烈な縦割り社会の凄じさは、何に例えたらよいのであろうか。その善し悪しをここで云々する紙面の余裕はないが、国柄の違いからか、これまで、さほどに深く論議されなかったことは否めない。しかし重要な根本問題であることに変わりはなく、最近、遅蒔きながら、中央指導型の大学改革論が萌出してきたが、これを皮肉な巡り合わせといったら過言であろうか。

ところで片や、経済成長に伴われた社会全般の要請に起因するのであろうが、以前に比べて、大学の乱立が激しくなった。これは喜んでよいのか、悲しんでよいのか俄には断じられないが、将来に向けて、大きな問題を醸し出してきたことは覆うべくもない事実であろう。

というのは、かつて大学は、程度に差はあれ、

Gemeinschaftに立脚していた筈である。ところが、流通機構の速やかな発達に伴われて変貌した社会の要請によって、大学を含めた高等教育機関は、否応なしに変容して、今や遂にGesellschaft化、つまり「会社化・企業化」してしまっただけである。しかも、さらに驚くべきことは、幼稚園から大学に至るまでの一貫したGesellschaft化である。卑近な例として、好むと好まざるとにかかわらず、多かれ少なかれ学習塾・予備校など、いわゆる教育企業の洗礼を浴びた経験は、諸君の記憶に新しいであろう。この過酷な現状は連鎖的に波及して、今や、大学といえども、企業の単なる道具であって、高学歴社会のキャッチフレーズに裏打ちされた就職（没个性的）ロボット集団製造工場に過ぎない、という側面が露呈されつつある。大学とは、そのような<sup>ひんしゅく</sup>輦轡を買ったままでよい存在なのであろうか。尤も、このような傾向は、我が国ほどではないが、諸外国においても一部問題化しているという。大学は荒廃しつつあるという声は、この間の事情を指し示しているであろう。

さて、このような問題点だけが目前に晒されると、諸君は大学に対して抱いていたイメージが崩れて落胆するかもしれない。だが、新入生諸君、こんなことで悲観するには及ばない。高度な学問・研究を基盤とした真理の探究を使命とする大学とは、ただ単に高度経済成長の流通機構を維持する担い手養成にあるのではなく、本質的には、人間一人一人の知的自己研鑽と自己改革・陶冶のためにあるのだ、ということを一に銘記してもらいたい。したがって、大学人は、意識の内面において、孤高でなければならない。そのための第一歩として、たとえ諸君の失笑・冷笑を買うことになろうとも、次の一言を敢えて諸君に呈したい。これから、大学人の一員として学生生活を送るからには、諸君の精神生活に不可欠？といわれる漫画に、ウツツを抜かすのも時にはよいが、少しでも多く「活字」に触れて親しむべく努めよ、と。

（ながもり はじめ：医学部教授・館長）

# 大学行政の中の著作活動

—自己評価の一端を考える—

水野益継

はじめに

大学院生の頃、高名な刑法学者のゼミのくつろぎの一時だった。私は、唐突にも、「先生は、こんなにもすばらしい沢山の著書を持たれて居られるが、先生御自身では、その中で一番出来のいい本といえ、どの本ですか？」と聞いたことがある。あっけにと取られた恩師の顔が今でも忘れられない。しばらくして静かな口調で「君！著作とはね、子作りと同じなんだよ。その時々々の苦闘の結晶であって、自分の産んだ子供と同様、どの子供が優れていると親にとっては判然といえないように、誰方の著作でも、それぞれの長短があるものだよ！」と諭されて赤面したことを思い出す。

ここに琉大勤続20年に及んで、日暮れて道となく覚えながら、取えて、自著に関する何んらかの省察を試みても、まずに面映ゆいところである。が、なまじいに自修育自学（今様の自己評価）のつもりで、過ぎ去りし往時を追憶しつつ記してみたい。

さて、誰方にとっても、未来のことは分からないことだ。けれども、多くの確実な過去が何んらかの希望を与えてくれるのが歴史的現在（historical present）であり、また歴史的真理（historical truth）といえそうである。私にとって、かのクラーク博士の名言もなつかしい。即ち、Boys be ambitious は陳腐で誰でも知っているが、その後続する部分の言葉で幾分救われた昔日の忘れえぬ気持を想起するからである。

1973年、私は助手として、念願の琉大就職と長男出生の喜びに重なっていた。ところが、私の「初月給」はたったの《7万8千円也》の封を切ったことであった。就職できたという兎角の嬉しさと一抹の生活不安の入り混った複雑な心理が今でも忘れられない。——因みにそのクラークの言葉とは、“Boys be ambitious. Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement,

not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.”であり、意識すれば、たしか「大学教官のアンビシャスとは、金に対する望みを持つでなく、利己的虚栄のためならず、いわば、窮しても泣きごとをいわず、憂えて失意もせず、人の世の深き禍福にも耐えて向学すべきだ」との解釈を読んだのである。想えば、いろいろとパワー・シフトを遂げてもある。

## 1. 著作活動と大学行政の間（はざま）

凡そ、大学人の三つの使命には、(1) 研究 (Research)、(2) 教育 (Education)、(3) 公開 (Extension) とされるが、現実には職責として学内行政 (University autonomy) が課されている。教官個人人の公務分担には、多少の相違があるものの、否応なしに、対内的には入試業務から、卒業業務まで、一見、毎年同じように見えても、新事例に甲論乙駁とあけくれるのである。一方、専門家としての真摯な中堅以降の教官ともなれば、自治体等々の対外的諸委員会等への参画があり、うかうかすると研究などとは程遠い繁雑の世界に追いやられていくことになるのである。

さて、ここに一工夫が必要となる。——というよりも、それら火急的な学内行政事項に没入することになれば、これもその深化した向うには、多くの本質的論点が隠れていることを発見せねばならないのである。そしてそれらが自己の研究テーマとは別世界のことだとすると、新たな負担感にさいなまれていくことにもなる。

それを何とか脱する手段はないものかと私は悩んだのである。その時、ハッと「知は行の始めなり、行は知の完成なり」とされる王陽明の言葉を思い出した。——ならば、只今の職責としての行政作業の“知”を、なんらかの方法で自己のルーチンともするメイン・テーマに関係

概念を連鎖できないだろうか。若しもできるとすれば、どこで自己のテーマと《円通》していることになるのであろうか。その「特異点」(singular point)と「共和点」(harmonic point)を考えてみることにしたのである。

即ち、私の本道とするテーマの刑法における「行為論」を考えるにあたって、さまざまな人間行為がある中で、『犯罪行為』と特定される行為も、結局は、いろいろな現実社会の中の産物として輩出される何らかの特異点を持った「人間行為」に変わりはないのだから、当該の学内行政事項の中に、過去の間人関係と連関してある通事論的な課題といえる「通性原理」(Common quality of thing)と現実の同時代にみる他の諸々の共時論的な「個性原理」(haecceity)が存在しており、その両者の関係概念を求める努力をすればいいのではないだろうかと考えたのである。

いってみれば《人間と人間との関わり合いの仕方の全体》が、ただ今の中に場所を違えているだけなのだということに思い至れば、多くの事柄は、姿を替えて殆どが《通徹》していくように思えるのである。例えば、「専門馬鹿」という言葉のあるように、『論語』を読むにおいて、専門的漢学者の書く『論語』ばかりを読みあさっても、全々面白くもないものである。それよりも、倫理学、心理学、社会学、歴史哲学といった隣接諸分野からの実証的な渉獵作業で語られる所の、「論語考」が展開されて初めて、真に感興を覚える学問に転化していることを知るのである。いわば、「単なる知識」と「活きた学問」との特異点(singular point)を放って、自己のテーマにも活用し応用されていくのである。——この辺りから少しく「会議疲れ」や「<sup>パーティー</sup>会合疲れ」からの心理的脱走があり、自己のテーマと連動する活学思考が可能となって来るのである。もともと人間関係の原理・原則とは、それほど革命的な変化は少ないものではないだろうか。常に自修育自学(自己評価)としての省察をば、そもそも人と環境との相互関係がそれぞれ相俟って自由自在に変化させる信念でいるかぎり、勝負は知識ではなく、知恵で戦えばいいのではなからうか。

このような基柱を立てて臨めば、成程、私自

身のこれまでのささやかな著作活動も、例えば、「編著」となっている作品も、思えば多忙をきわめた学内行政の中か、または、それらに類似する繁雑な忙中にあえぎつつ、必死に切り抜けたその時々々の《自己の行為論》のケジメの何者でもないのである。それこそハイセンスな「出来のいい本」であるか、どうかは、「第三者の主観」に譲る以外にその評価は不能である。以下、往時の公刊への陣痛を思い出して記してみたい。

## 2. 著作活動の省察とそのハイライト

自己評価としての著作活動の態様もいろいろな型があるので、次の3つの類型で、これまでの私自身が参画した編著や共著、及び単行本に至った体験的反省のいくつかをまとめてみたい。

### (A) 学内行政の中での著作参画

(1) 『琉球大学研究者総覧』(A Catalogue of Scholarly Research)の第一号の発刊は思い出深い。1978年、琉球大学広報委員会の委員長として、私が「研究者総覧」の発刊を提案し、翌年の1979年に第一号の公刊をみたものであった。当初、各学部別の「総覧」をまとめて、ゆっくり時間をかけて最終的に全学部をまとめるようにしようとの消極論と、それでは百年河清を待つようなもので、やるなら一気にやるべきだとの私の積極説が採用され、予算も、《135万円也》は計上可能だとの学生部の内諾もとりつけ、一気に走り出したが、原稿集めには、一年のねばりと教官個人々への総当りでもあった。(イ)思想調査に類するものにはならないか、(ロ)ノウハウが盗まればはしないか、(ハ)大学版の勤評に使用されるのではないか、等々の批判の声が早くも出ていた。当時すでに、東工大や筑波大などの前例書があり、それらが「経歴中心」であったのに、わが琉大のは「研究中心」を編集方針とした。平成5年の今日、「自己評価」なる表現になって、教官の業務動態の範例の一つともなり、今や16年の歳月が経てみると、第6号のA5判の堂々たる成年像へと発展した姿に、感無量である。当時の宮城健学長は、喜ばれて、「隔年刊行物に定着させたい」

とされていた。当時学長以下453人の教官が、平成5年の第6号にも至れば、教官766人の現員中、留学その他の都合などで678人の収録となっている。尚、外国人教師及び客員教授等は除外されてのことである。

(2) 『国際化時代と生涯教育』(琉大公開講座・ラジオ用テキストの編著)、1985年の放送利用による大学事業開設の一環として、テレビ・ラジオのそれぞれに13講の講座が要請された。ここに13個のテーマが、それぞれ担当教官の課題であり、大学行政に連鎖する典型的な著作活動でもある。例えば、中枢的な製作理念として、「主人公とヒーローをひつつかんで声援できるか。悪玉を野次れるか。動きは速く猛烈か。

——答えがイエスならば、そのアイデアをひつつかんで製作にかかれ」などといわれる《アラン・ラッド2世の法則》などが例えばテレビ製作などには参照されたのであるetc.

#### (B) 学外活動での編著寸描

教官にとっても毎日の仕事そのものが教科書テキストとされなければならない側面を持つ。どんな著作でも、《はしがき・あとがき》の中で、該書誕生の経緯が詳しくふれられる。先ず、1985年『法学概論』(八千代出版)では、教官10人の共同執筆であり、続いて1988年の『法学入門』(八千代出版)では、わが琉大、沖国大、沖大の三大学総38人の参画編著であった。大きな副産物としては、当書を契機に『沖縄法政学会』(平成2年)の創設にもつながったことである。

ついで琉球大学教育学部移動大学研究会のスタッフの成果として、1986年『移動大学の軌跡』(ひるぎ社)で通算5回、46講座が沖縄事務所や三自治体などと当研究会とセットされた記念出版となった。これに触発され、さらに私の郷土愛としての郷土史発掘への興味から、1990年与勝半島の護岸完成を導いた先達の伝記として、『真境名安明先生と郷土愛』(糸満印刷)並びに、郷土史といえる事物を、前後、左右、上下、表裏、内部と世界といったあらゆる角度からの一種違った仮説と考現学的な考証として《往古の行為論で学ぶ新与勝風土記》にすべく、1992年『ヤブチ式土器と屋慶名村むらの誕

生』(糸満印刷、上・下巻全1500頁)の比較的大著にも転化したことである。本書の気概とするところ、「一人ニヨッテ国ハ興リ、一人ニヨッテ国ハ滅ブ」(蘇老泉イチニン)との気負いでもあったが、兎に角、真正面から取り組んでの郷土作興の目標でもあった。

#### (C) 個人的研究としての著作(routine)

全ての論稿は結果的には、ルーチンとしての個人的研究としての成果にいずれは収斂されていく。多くの文献を集め、視点を模索して、出来るだけ独創的な著作を残すことは、言うは易しくも至難なことである。さらに他人が模倣し、引用してくれるような著作をとみると、余程、深沈厚重なる姿勢が要請されることであろう。

しかし、『単行本』として上梓に至る希望峰は、やはり一学究としての一里塚といえるのではなからうか。最近では、単著で百冊、二百冊刊行記念パーティなどのニュースも多々見聞するように、超人的著作者たちの知的生産業もみるけれど、前記のように、大学の自治・学問の自由といった昔日の幻想的な「象牙の塔」は、現実の大学の図式からは消えているのである。

このように専門書ともなれば、中身の濃淡にも依ろうが、短時日の連発はなかなか困難である。私にとって、ささやかな本格的な作品としては、1990年に『刑法学と行動科学』(八千代出版、337頁)がその嚆矢となっている。英原書の『監訳』としては1987年に、『裸の行為論』(時潮社)があり、見切りをつける決意の目をもって、これまで書きためた紀要論稿をまとめて現在、『教授会と学問の自由』(八千代出版、近刊)の第二弾を進行中である。思えば、単行本ともなれば一面、書きやすくなるのであろうか、これからである。その他、文献集録などにも興味をもってまとめてもいるが、「事物の先見力は、努力と意欲の関数だ」とか「現実には理論で感得し、その理論は現実で確認する」といった資料を以て資料に語らしめる手法でのアプローチは、やはり、雑事に足をとられぬ注意を払いつつも、言うにやさしく、実践に逡巡している自分自身のもどかしさの中にある。すなわち、今やボーダレス化の波は、われわれの著作活動にも24時間化され、『25時』化(手おく

れ)の観しきりである。

### むすび

20周年の節目に立って、ささやかにも自己の編著、共著、単行本、その他を執筆したその回顧として、やはり書くことの大きな成果は、知識の確実性を自己確認し得るところにあるのではなからうか。該書に対する毀誉褒貶への希望と不安は、えてして物書きの「責任同時存在の原則」である。それらの長短を恐れては、何も書かないにこしたことはないが、トゲのある批判主義思考が次第にかけをひそめて、生産的な「自己評価」(Do Who me!)時代に至ると、やっぱり書いていく中で、いくばくの誤りもあれば、これも生産的誤謬となし、それも坦懐に是正して前進するといった真の学問的平和郷の土壤もつくられていくのではなからうか。繁雑な学内行政ばかりにノメリ込んで、「書物について学ぶよりも、むしろ、人間について学ぶことが必要である」(ラ・ロシュフコー)といったモットーで、日本的根まわしの対人融和主義で打ち過ぎて仕まうか、又は、一般社会であれ、大学社会であれ、とにかく「日本社会の特質は、義理と情実と因縁と不公正の寄合世帯だ。行動基軸は自分主義である。例えば、自分の前を走るランナーが憎らしい。できればつまずかしてやりたい。引きずり倒すだけの度胸と腕力のない人ほど、胸の奥深い部分で炎がチロチロ燃えている。この世は嫉妬、ねたみ、やっかみ、ジェラシーの色に染め上げられている。その代表が男たち、得にインテリ・デイス・インテリの大群だ」(早坂茂三)などとされる日本の政治風土を垣間みるにつけても、時としてその近似風景におののき、これでは、名もなく清く静かに「洞が峠」でノンビリ打ち過ごしたい気分も成程とうなづける。

一方、誰にも強制はできないが、精読者の少ないにぎやかな出版記念祝賀会ブームなどの相互礼賛社会の中でも、“ほめ殺し”にされて、集中的に本人の研究にはムダな仕事(ヤボヨウ)を沢山押しつけられて、大意なるエネルギーが放散されることもある(因みに、この種ピエロをウチナーグチでは、フミアガイまたは

ウスブラーと称されている)。——結局、「知性の狡智性」の厚いガードの向うには、精神的にも道徳的にも危機の中でも漫然と傍観している無関心層が結果的には俗世間的表現での得をしている人が多くなる。

——そんな所でダンテの『神曲』の地獄篇に「地獄の一番熱い所は、道徳的危機に臨んで中立を標榜する輩の落ちる所」といった言葉やら、清末の曾国藩の説く『国家崩壊の三前兆の原理』とは、「第一に、白黒がわからなくなること、第二に、善良な人々が沈黙して遠慮がちになり、くだらぬ人間が、いよいよ、でたらめをやる。第三に、問題が深刻になるとあれももっとも、これも無理からぬことと、口舌の長いやわらかタッチの一見、聡明才弁型の人が見れ、どっちつかずの痛からず、かゆからずの煙幕(とうかい)翰晦人物が牛じるようになる」とあることなどを引用して来ても、聞く耳をあまり借してもらえないところである。

——でもあと10年後の停年時に想うべきことなのだろうか——「新しい時代を創造するような著作(人物)は、知識の学問や、技術の学問からは生まれにくい。やはり知恵の学問・徳の学問、そういう教育の中から出てくる」(聖賢の学)とか又は、「コレカラノ時代ヲ動カスモノハ主義ニ非ズシテ人格デアル」(オスカー・ワイルド)などの言葉を信じて、只、たち尽す日々でいいのだろうか。

新時代にあっては、例えば「専門的な知識を持ちながら、ある意味ではふくらみのある人材を育てる」といった教育に携わる《先生方》にもいろいろあって、単に本を読ませたり、推理や試験などで技術中心的な教師のことを、「読師」(レーゼマイスター Lesemeister)というのに対し、あるべき真の人間の生き方を教える教師を「導師」(レーベマイスター Lebemeister)というらしい。この二分法でも一体、我々教官にとってどの生き方がいいのであろうか。例えば「21世紀への大学改革」の一端として——「結局、大学の自己革新能力、自己管理能力、というものは、大学を構成するそれぞれの責任、立場を異にする諸組織が対外的には全体として果たすべき課題を共通認識としておきながら、内部的には、それぞれ固有の

責任の役割を十分に果たせるようになってい  
かどうにかかっている」(『大学は生き残れ  
るか』高等教育研究会・機関紙共同出版・1991  
年)ともみるのであるが、この変動社会の短い  
スパンの中で、老若男女・新旧交替の早いキャン  
パスの中で、これでもか、これでもかと難問  
の続く大学行政作業が、おいかぶさって来るに  
及んで、真の著作活動の目標の一つともされる  
「窮スルニ困シマズ、憂エテ意衰エズ、禍福終

始ヲ知ッテ惑ワザル」(荀子)  
という実存的な、この導師的著作に与する著作  
活動は、今後、私にとっても可能であろうか。

前記の私の研究と職責下の創意工夫のつもり  
の著作活動にも、やっぱり限度があるように思  
える今日この頃である。

(みずの ますつぐ：教育学部教授・法律学)

## 沖縄関係資料新着案内

1992年12月～1993年1月

### 0類 総 記

- |                                                                                                     |          |                                                                                                                                                          |          |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 1. 私の好きな100冊の沖縄：オキナワブックセ<br>レクション：沖縄本感想文集／まぶい組編<br>ボーダーインク,1992.7                                   | 025-MA   | 1992.9                                                                                                                                                   | 200.4-DA |
| 2. NHKふるさとデータブック10／NHK情報<br>ネットワーク編 日本放送出版協会,1992<br>内容：九州2・沖縄                                      | 059-NI   |                                                                                                                                                          |          |
| 3. 戦争と郷土の歴史を考える 福武書店,<br>1992.3<br>(郷土の研究：理科・社会がおもしろく<br>なる博物館:9)                                   | 069-KY   |                                                                                                                                                          |          |
| 4. 歴代寶案：校訂本 第一～二冊／沖縄県立<br>図書館編 沖縄県教育委員会,1992.1-3<br>校訂：和田久徳<br>内容：<br>第一冊：第一集巻一～二二<br>第二冊：第一集巻二三～四三 | 093.2-RE |                                                                                                                                                          |          |
| 5. 歴代寶案第一集年時順目録・第一集解説：<br>永楽22(1424)年～康熙36(1697)年／和田久<br>徳[編] 沖縄県立図書館,1992.9<br>内容：『歴代寶案』校訂本第二冊抜刷   | 093.2-RE |                                                                                                                                                          |          |
|                                                                                                     |          | 1992.9                                                                                                                                                   | 200.4-DA |
|                                                                                                     |          | 2. 地域と民族(エトノス)／荒野泰典[ほか]<br>編 東京大学出版会,1992.9<br>(アジアのなかの日本史:4)                                                                                            | 200.4-KA |
|                                                                                                     |          | 3. 沖縄同時代史 第1-4巻／新崎盛暉著 凱<br>風社,1992.4<br>第1巻：世替わりの渦のなかで：<br>1973～1977<br>第2巻：琉球弧の視点から：1978～1982<br>第3巻：小国主義の立場で：1983～1987<br>第4巻：柔らかな社会を求めて：<br>1988～1990 | 201-AR   |
|                                                                                                     |          | 4. 沖縄戦こぼれ話／浜松昭著 月刊沖縄社,<br>1990.6                                                                                                                         | 201-HA   |
|                                                                                                     |          | 5. 南の王国琉球 日本放送協会,1992.6                                                                                                                                  | 201-MI   |
|                                                                                                     |          | 6. 波瀾の琉球王朝：南洋王国に迫る嵐／三谷<br>茉沙夫著 廣済堂出版,1992<br>(Kosaido books)                                                                                             | 201-MI   |
|                                                                                                     |          | 7. まんが首里城ものがたり：琉球王朝上,下／<br>新里堅進まんが 琉球新報,1992.10                                                                                                          | 201-SH   |
|                                                                                                     |          | 8. 甦える琉球王国：南海に生きる大琉球浪漫<br>／武光誠[著] KKベストセラーズ,1992.11<br>(ワニ歴史文庫)                                                                                          | 201-TA   |

### 2類 歴 史

1. 沖縄近世史の諸相／田名真之著 ひるぎ社,

9. 『歴代宝案』の基礎的研究/邊土名朝有著  
校倉書房,1992.9 201.18-HE
10. 琉球王国：大交易時代とグスク：復帰20周年記念特別展／沖縄県立博物館編 沖縄県立博物館友の会, [1992]  
201.18-OK
11. ひやむざかなもり：写真に見る平安座今昔／平安座今昔写真集編集委員会編 平安座自治会,1984.6 223-HE
12. ヤブチ式土器と屋慶名村の誕生：往古の行為論で学ぶ新與勝風土記 上, 下巻／仲地和雄, 水野益繼編 與那城村陽明学研究会, 1992.7 223-NA
13. 奄美郷土史選集 第1,2巻／坂井友直編著 国書刊行会,1992.5-6 260-SA
14. まんが偉人伝：沖縄史の五人 琉球新報社, 1992.3  
内容：  
1:儀間真常：産業の大恩人／徳田友子原作；大城美千恵まんが  
2:羽地朝秀：政治の仕組みをととのえた／仲本瑩原作；がなははるおまんが  
3:程順則：沖縄の文化をかためた／池原正一原作；保里安則まんが  
4:蔡温：政治に敏腕をふるった／新里堅進原作まんが  
5:宜湾朝保：沖縄の運命を決めた／比嘉加津夫原作；知念政順まんが  
280.8-MA
15. 沖縄県姓氏家系大辞典／沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編著 角川書店,1992.10 (角川日本姓氏歴史人物大辞典;47)  
288.1-OK
16. 日本仁医物語 第9,10巻／原田種夫, 志村有弘編 国書刊行会, 1984.1  
内容:九州・沖縄篇I,II 289-N77
17. 西郷隆盛と沖永良部島／先間政明著 八重岳書房,1992.9 289-SA
18. 沖縄のすべて：沖縄復帰20周年記念：沖縄・離島情報スペシャル 創栄出版(発売), 1992.7 290-OK
19. ぴあ Map 沖縄グルメ・ショッピング&ダイビング最新ガイド ぴあ大阪支社,1992.4 290-PI
20. ぶらりスーヅグー／志良堂仁, 古塚達朗著 沖縄出版,1992.6 290.2-SH
21. '92るるぶ沖縄 JTB日本交通公社出版事業局,1992.4 (るるぶ情報版;436) 290.5-OK
22. 日本列島なぞふしぎ旅. 九州・沖縄編／山本鉦太郎著 新人物往来社,1992.8 290.9-YA
- 3類 社会科学
1. 沖縄からの出発：わが心をつめて／岡部伊都子著 講談社,1992.10 (講談社現代新書) 302-OK
2. 文書づくりの手引書：分かりやすく親しみやすく／沖縄県総務部文書学事課編 沖縄県総務部文書学事課,1992.3 317-OK
3. 沖縄の経済開発：本土復帰から20年 高槻博著 社会評論社,1992.4 332-TA
4. 日本の陰謀：ハワイ・オアフ島大ストライキの光と影／ドウス昌代著 文藝春秋, 1991.9 334.4-DU
5. 狂信：ブラジル日本移民の騒乱／高木俊朗著 ファラオ企画,1991.2 (原点叢書;2) 334.4-TA
6. 百年記念誌／百周年記念誌編集委員会編 宜野湾小学校創立百周年記念事業期成会, 1983.2 376.2-GI
7. 創立100周年記念誌／創立100周年記念事業期成会編 伊平屋小学校,1982.2 376.2-IH
8. 百年誌／狩俣小学校創立百周年記念事業期成会編 狩俣小学校創立百周年記念事業期成会,1988.1 376.2-KA
9. 創立100周年記念誌／美里小学校創立100周年記念事業期成会[編] 沖縄市立美里小学校,1983.3 376.2-MI
10. 創立百周年記念誌：昭和57年／仲里小学校創立百周年記念事業期成会記念誌編集部編 仲里小学校創立百周年記念事業期成会, 1986.12 376.2-NA
11. 附属十年：創立十周年記念誌／琉球大学教育学部附属小学校[編] 琉球大学教育学部



- 附属小学校創立十周年記念誌編集委員会,  
1992.3 376.2-RY
12. 創立100周年記念誌／高嶺小学校創立100周年記念事業期成会記念誌編集委員会 糸満市立高嶺小学校,1987.1  
376.2-TA
13. 創立百周年記念誌／恩納村立山田小学校  
[編] 恩納村立山田小学校, [19--]  
376.2-YA
14. 屋我地の民話／名護市史編さん室編 名護市教育委員会,1992.3  
(名護市史叢書;13) 388-NA
15. 沖縄の名言：残しておきたい昔言葉／伊良波長傑解説；外間峻岩書；黒潮隆絵 郷土出版,1992.3 388.8-IR

4類 自然科学

1. 毒蛇／小林照幸著 TBSブリタニカ,1992.5  
490.4-KO
2. 長寿世界一は沖縄その秘密は豚肉食だった：ダイエット食は、ボケ・早死を招く／松崎俊久著 祥伝社,1992.6  
(ノン・ブック;326) 498.38-MA
3. 薬草ライフ. 体質改善編, 内臓調整編／吉川敏男著 ニライ社,1992.7  
499.87-YO

6類 産 業

1. 転機に立つ沖縄の水産業／登川正太郎著 沖縄県近海鮪船主協会,1991.2  
660.4-NO
2. 大宝証券三十年史：1961-1991／大宝証券株式会社[編] 大宝証券,1992.4  
676.39-TA
3. 沖縄の鉄道を復活させよう／登川正太郎著 [登川正太郎],1992.1 681-NO

7類 芸 術

1. 季刊「銀花」第89号(1992.春) 文化出版局,1992.3  
特集1：南の島へ：孤高の画家, 田中一村の世界  
奄美に逝った孤高の画家, 田中一村／中野惇夫

- 琉球の羽衣：あけずば一蜻蛉の羽を織り出す人, 上原美智子／太田雅子  
705-KI
2. 赤牛モウサー：沖縄の絵本／儀間比呂志作・絵 岩崎書店,1991.11  
(絵本の泉;1) 726.7-GI
3. 大神島：記憶の家族／勇崎哲史著 平凡社,1992.6  
748-YU
4. 琉球漆器：歴史と技術・技法 琉球漆器事業協同組合,1991.11 752-RY
5. 沖縄の心を染める：伝統の紅型を復興させた城間栄喜の物語／藤崎康夫作 くもん出版,1992.5  
(くもんのノンフィクション・愛のシリーズ;22) 753.8-SH
6. 首里城正殿の鐘と墨絵『光と影の世界』南海梵鐘の世紀／小島環礼, 金城美智子著 沖縄総合図書,1991.12 756.4-KO
7. 記念誌：ハーモニーで結ばれた友情／琉球放送合唱団友の会[編] [琉球放送合唱団友の会], [1991] 767-RY

9類 文 学

1. うち／島袋園子著 [島袋園子],1990  
904-SH
2. 詩集水にながれて／泉見享著 愛編集室：垂水社,1992.6 917-IZ
3. 詩集風にふかれて／泉見享著 愛編集室 垂水社,1992.6 917-IZ
4. 水納あきら全詩集／水納あきら著 海風社,1991.7  
(南島叢書;58) 917-MI
5. うちなー：ちむがなしゃ：仲宗根清詩集／仲宗根清著 潮流出版社,1992.4  
917-NA
6. 沖縄風と少年：佐藤照雄詩集／佐藤照雄著；津波信久絵 教育出版センター,1992.6  
(Junior poem series;79) 917-SA
7. 南の島から／山本卓著 劇団はぐるま座出版部,1991.2 920-YA
8. 南十字星への誓い／儀間海邦著 新幹社,1991.11  
(沖縄の少年／儀間海邦著;第3部)

- 930-GI きた／伊波園子著 岩波書店,1992.6  
(岩波ジュニア新書;207) 950-IH
9. 台風銀座／儀間海邦著 新幹社,1992.5  
(沖縄の少年／儀間海邦著;第4部) 18. 朝鮮人軍夫の沖縄日記／金元栄著;岩橋春  
美訳 三一書房,1992.7 950-KI
- 930-GI 19. 沖縄戦の学徒隊 日本図書センター,  
店,1992.3 930-HI 1992.5  
(「戦争と平和」市民の記録;14) 950-KI
10. 黄昏の家：故郷の花／比嘉辰夫著 西田書  
店,1992.3 930-HI 20. 忘れな石：沖縄・戦争マラリア碑／宮良作  
文;宮良瑛子絵 草の根出版会,1992.3 950-MI
11. お母(かあ)さんはアダン林(ばやし)でねむ  
ってる／真尾悦子作;こさかしげる絵 金  
の星社,1992.4  
『すずはもうならない』(金の星社,  
1983.2)の改訂復刊 930-MA
12. 夏の大將／宮里尚安著 海風社,1991.3  
(南島叢書;60) 930-MI 21. 閃光の中で：沖縄陸軍病院の証言／長田紀  
春, 具志八重編 ニライ社,1992.6 950-NA
13. 小説琉球処分／大城立裕著 ファラオ企画,  
1991.4 930-OS 22. アリランのうた：オキナワからの証言／朴  
寿南編集 青木書店,1991.11 950-PA
14. The teahouse of the August moon / by  
John Patrick ; adapted from the novel  
by Vern Sneider. --London : Heinemann  
Educational Books , 1955  
(The drama library) 930-PA 23. 最後の戦闘：沖縄・硫黄島戦記 潮書房,  
1989.11 (丸.;別冊.太平洋戦争証言シリーズ;13) 950-SA
15. さよなら,海の女たち／椎名誠著 集英社,  
1988.9 930-SH 24. 沖縄・チビチリガマのゝ集団自決、／下嶋  
哲朗[著] 岩波書店,1992.3  
(岩波ブックレット;No.246) 950-SH
16. ほくらの秘島探検隊／宗田理[著] 角川書  
店,1991.5 930-SO 注) 各資料末尾の記号は請求記号です。
17. ひめゆりの沖縄戦：一少女は嵐のなかを生

## 本学教官著作寄贈図書案内

1992年12月～1993年1月

宜野座 光昭 (理学部)

量子力学はこうして生まれた／並木美喜雄・  
宜野座光昭・中里弘道編 John Hendry [著]  
丸善,1992 421.3-HE

田幸 正邦 (農学部)

多糖類のゲル化機構に関する研究／田幸正邦  
著 琉球大学,1993 429.1-TA

小倉 暢之 (工学部)

アフリカの住宅／小倉暢之著 丸善,1992  
523.4-OG

平良 信勝 (教養部)

実存哲学の宗教的論考／平良信勝編 法蔵館,  
1992 114.5-TA

注) 各資料末尾の記号は請求記号です。

## 図書館事情

### [会 議]

#### ◎図書館運営委員会

第198回 平成5年3月8日(月)

#### 協議事項

- (1) 平成5年度大型コレクションについて
- (2) 平成5年度沖縄関係文献調査収集保存事業計画について
- (3) アメリカ研究図書選択委員会の解散について
- (4) 平成6年度概算要求について
- (5) その他

#### 報告事項

- (1) 平成5年度概算要求について
- (2) 1993年度外国雑誌の購入について
- (3) 図書館事務部長会議の終了について
- (4) 平成4年度後期教官選書結果について
- (5) その他

平成4年度会計実地検査について  
図書館職員研修会について

### [講演会]

#### ◎図書館職員研修会

日時 平成5年1月28日(木) 15時～17時

場所 図書館会議室

演題 「古典のおもしろさ」

講師 石田義光氏

(東北大学附属図書館情報管理課専門員)

#### ◎図書館職員研修会

日時 平成5年3月9日(火) 15時～17時

場所 図書館会議室

演題 「情報・文字・書物」

講師 長尾公司氏

(東北福祉大学社会福祉学部教授)

## 医学部分館だより

### ◎看護関係ビデオ新着案内(その1)

1. 訪問看護の実際 ①訪問看護を始めるにあたって ②訪問看護の場面
2. 酸素療法と呼吸管理 ①基礎知識と器具の取扱い ②急性呼吸不全の看護 ③慢性呼吸不全の看護と在宅酸素療法
3. 口腔の管理とその実際—障害のある人のために— ①知っておきたい歯の問題いろいろ ②歯の健康は予防から
4. 看護論シリーズ ①ヴァージニア・ヘンダーソン ②シスター・カリスタ・ロイ ③アイダ・J・オーランド, アーネスティン・ウィーデンバック ④マーサ・E・ロジャーズ ⑤ドロシー・E・ジョンソン ⑥現象学的看護理論—パースィを中心に—
5. 看護論シリーズ ①ドロシア・E・オレム ③フローレンス・ナイチンゲール
6. 看護の歴史シリーズ ①フローレンス・ナイチンゲール その1・その2 ②日本に

- おける仏教と看護 ③日本最初の看護学校  
④アメリカの看護 [I]初期の看護学校 [II] 専門職看護への道 ⑤公衆衛生看護の歴史 ⑥戦後の改革—GHQ時代—
7. 老人看護学シリーズ—老人看護の基礎技術 ①食事の援助 ②排泄の援助 ③皮膚・粘膜の清潔と保護 ④寝たきりの予防 ⑤褥瘡の予防 ⑥生きがいへの援助 ⑦痴呆老人の看護 [I]痴呆老人の特徴(症状) [II]痴呆老人とのかかわり
  8. 老人看護学シリーズ ①老人看護概論
  9. 看護診断ビデオシリーズ 日本語版 ①看護診断：概念と実践 ②看護診断：総論 ③看護診断：身体可動性の障害 ④看護診断：栄養の変化—過剰摂取— ⑤看護診断：安楽の変調—急性の疼痛— ⑥看護診断：皮膚の統合性障害 ⑦看護診断：セルフケア能力の障害 ⑧看護診断：知識の不足
- (次号につづく)

## 図書館年間主要スケジュール

図書館の開館時間その他に関する年間の主要スケジュールは、おおむね下表のとおりです。具体的な期限等は、その都度お知らせいたしますが、あらかじめご注意ください。  
 なお、休館等については、各学部掲示板および館内掲示にご注意願います。

	大学行事等	図書館行事等	休業期等		休日開館
			本館	分館	
4月	~4/7 春季休業	----->	★	★	
5月		新入生オリエンテーション 学生用図書選書依頼			
	22 開学記念日	----->		休館	
6月		次年度雑誌新規中止希望調査 長期貸出開始 (返却9/10)			
	30 -----				
7月	10~8/31 夏季休業	----->	★	★	
8月		----->	★	★	
9月	1 ~20 前期試験	----->			☆
10月	1 ~11 秋季休業	----->	★		
11月	大学祭 (琉大祭)	----->		休館	
12月	15 -----	長期貸出開始 (返却1/17)			
	25 ~1/7 冬季休業	----->	★	★	
	28 ~1/4 年末年始	----->		休館	
1月	入試センター試験	----->		休館	
		大型コレクション推薦依頼 図書購入請求受付締切			
2月	1 ~19 後期試験	----->			☆
	19 -----	長期貸出開始 (返却4/11)			
3月	1 ~4/7 春季休業	----->	★		

(注) ★ は、開館時間の短縮を示す。

平日 8:30 ~ 17:00      土曜日 閉館  
 (通常は、平日 8:30 ~ 21:00      土曜日 13:00 ~ 17:00)

琉球大学附属図書館報 “びぶりの” 第26巻 第1号 [通巻第98号]

平成5年3月30日 発行

発行 琉球大学附属図書館 〒903-01 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地  
 電話 098 (895) 2221 内線 (2143) 編集 びぶりの編集委員会